

安曇野市の埋蔵文化財第1集

東小倉遺跡 V

(～県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書～)

2006・3

長野県安曇野市教育委員会

東小倉遺跡 V

(～県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書～)

2006・3

長野県安曇野市教育委員会



調査区 (A区) 全景

序

東小倉遺跡は、縄文時代を中心とする包蔵地が集まる黒沢川流域の中でも最も下流に位置する遺跡で、かねてから土器、石器の密度の濃い散布地として知られており、旧三郷村の中でも最大級の縄文集落があった所とみられています。

今回、県の道路改良工事が遺跡内を通ることになり、平成17年9月～12月にかけて発掘調査が行われました。東小倉遺跡では通算6度目の調査となり、これまでに見つかった住居址は53軒に及びます。いずれも下水道敷設や道路改良など、線的なごくかざられた範囲を発掘しただけの結果であり、まとまった面積を発掘すれば、どれだけの遺構が出てくるのか想像もつきません。東小倉遺跡の全容は未だ見えたとはいえないのです。

しかし、一連の調査で、遺跡西側の範囲が確認できたことや、当時の人々に影響を与えたとも思える水路の概要が判明したこと、土器・石器・土偶などの遺物から、当時の人々の暮らし振りが見えてきたことなど、その成果は重要な示唆を含んでいます。発掘の成果が、学校教育や生涯学習を通じて郷土の理解を深める一助になることを願うものです。

最後になりましたが、調査全般にわたりご指導、ご協力いただいた今村克調査員をはじめとする作業関係者の皆様、発掘工事の関係者他、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

平成18年3月

安曇野市教育委員会

教育長 望月 映洲

例 言

1. 本書は、東小倉遺跡内の県道小倉梓橋停車場線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、三郷村教育委員会（平成17年10月1日から合併により安曇野市教育委員会）が調査団を組織して実施した。
3. 本書の編集は、主として那須野雅好と今村克が行った。
4. 本書の執筆は、調査団で決定した分担によって行い、各文末に氏名を明記することにより、文責を明らかにした。
5. 本書作成における分担は次のとおりである。

遺構図整理・トレース	今村 克	荒井留美子	
遺物整理	荒井留美子	道浦久美子	
遺物実測・トレース	今村 克	荒井留美子	
写真（発掘調査）	今村 克	那須野雅好	
写真（遺物）	中田 育成	那須野雅好	
測量・実測図	今村 克	荒井留美子	道浦久美子
石質鑑定	木船 清		

実測図等の縮尺は図に示してある。

6. 調査の諸記録・実測図・遺物は、安曇野市三郷民俗資料館において保管している。
7. 遺構番号は、旧三郷村における平成5年の東小倉遺跡発掘調査から、Ⅲ次の県道小倉梓橋停車場線・Ⅳ次村道514号線・Ⅴ次東小倉12号線と続く一連のカウントである。

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査にいたるまでの経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の方法	3
第2章 東小倉遺跡周辺の環境	4
第1節 地形と地質	4
1 地形	4
(1) 梓川扇状地と黒沢川扇状地	6
(2) 黒沢川扇状地北部	6
2 地質	7
(1) 黒沢川扇状地	7
(2) 調査地点	7
第2節 歴史的環境と村内の遺跡	9
第3章 VI次調査の遺構と遺物	12
1 遺構	12
2 A・B・C・D区検出面出土土器	12
第4章 まとめ	24

図 目 次

第1図	安曇野市三郷埋蔵文化財 遺構包蔵地図	
第2図	黒沢川扇状地北部の地形	4
第3図	調査地点で見られる凹地と遺跡全体図	5
第4図	6号住居址北部の柱状図	8
第5図	6号住居址付近の柱状図	8
第6図	9号住居址西部の柱状図	8
第7図	調査位置図	14
第8図	遺構配置図	15・16
第9図	土坑66～79	17
第10図	土坑80～95	18
第11図	土坑96～108	19
第12図	土坑109～117・溝1・竪1	20
第13図	溝2	21
第14図	A区検出面出土土器拓影	22
第15図	竪1、B・C・D区検出面、溝2出土土器拓影	23

写真図版目次

巻頭カラー	調査区（A区）全景
図版1	B・C・D区全景
図版2	A区作業風景
図版3	測量・掘り下げ作業、D区作業風景
図版4	A区遺構
図版5	B区遺構
図版6	C区遺構
図版7	D区遺構

編集 平成3年12月
 平成11年6月部分修正
 平成18年3月修正

番号	時代	名称
1	縄文	一本松遺跡
2	〃	鳴沢A遺跡
3	〃	才の神遺跡
4	中世以降	浄心寺南塚
5	縄文・中世	浄心寺付近遺跡
6	縄文	東小倉遺跡
7	古墳?	アルプス学園前古墳
8	縄文・弥生	黒沢川右岸遺跡
9	縄文・弥生	チンクラ屋敷遺跡
10	縄文	南松原遺跡
11	〃	調整池北遺跡
12	〃	稲荷西遺跡
13	縄文・平安	丁田遺跡
14	縄文・平安以降	三角原遺跡
15	平安以降	楡中村遺跡
16	縄文・平安以降	楡小路遺跡
17	平安以降	楡上手遺跡
18	〃	栗の木下遺跡
19	〃	三柱神社東遺跡
20	縄文	白山神社横遺跡
21	〃	一日市場郵便局南遺跡
22	平安以降	上総屋敷遺跡
23	弥生	川岸最氏宅地遺跡
24	弥生・古墳	堂原遺跡
25	平安	若宮遺跡
26	平安・鎌倉	道下遺跡
27	中世	坂がいと遺跡
28	古墳?	平福寺付近古墳
29	縄文	長尾城址北遺跡
30	中世	長尾城址
31	縄文	赤坂西遺跡
32	〃	住吉竹原遺跡
33	〃	鳴沢尻遺跡
34	〃	西牧遺跡
35	〃	地藏沖遺跡
36	弥生	犬塚遺跡
37	平安	堀尻遺跡
38	中世	小倉城址遺跡
39	古墳?	北小倉1号2号塚
40	弥生	堂屋敷遺跡
41	古墳	山の腰遺跡
42	縄文	大日堂北遺跡
43	平安以降	古原沢遺跡
44	縄文	湯の久保遺跡
45	〃	黒沢浄水場東遺跡

番号	時代	名称
46	中世	富士塚
47	縄文	長者屋敷
48	縄文	千国橋北
49	縄文	大室遺跡
50	平安	及木西村遺跡
51	縄文	鳴沢B遺跡
52	近世	龍峰寺跡
53	縄文	五反田遺跡



第1図 安曇野市三郷埋蔵文化財 遺構包蔵地図

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査にいたるまで

安曇野市三郷の黒沢川橋左岸一帯に広がる地域は、縄文時代中期の住居址を中心に、土器や石器の密度の高い遺跡として知られていた。本地域一帯の遺跡の中では、南松原遺跡が年代的に古く、勝坂式土器の集落である。これに対し、東小倉遺跡においては、平成5年の第Ⅰ次調査における堀内國利氏宅北側に隣接する畑地、および平成9年の第Ⅱ次調査における県道小倉梓橋停車場線からは、加曽利E式土器が出土し、縄文時代中期後半の遺跡であることが確認されている。この東小倉遺跡一帯は旧南安曇郡下でも最大級の縄文遺跡であり学術的価値の高い地域である。

今回の発掘は、東小倉遺跡内の県道拡幅工事が行われることに伴う埋蔵文化財保護調査である。三郷村教育委員会では、これまでの確認事項と各工事の規模とを勘案し、次の点に留意し、県教育委員会と協議しながら、平成17年度に発掘調査を実施することにした。

- 1 調査総括を、今村克氏に依頼し、発掘調査体制を整えた。
- 2 今回の県道小倉梓橋停車場線は、第Ⅱ、Ⅲ次調査において道路北側の水路及び道路本線に沿って調査しているので、前回出土している住居址とのつながりを大事に調査していくことにした。

第2節 調査体制

調査主任	今村 克	(長野県考古学協会員)
作業員	山崎 照友	荒井留美子 有沢 芳明 小松 繁幸 小穴 兆司
	待井 敏夫	道浦久美子
整理員	荒井留美子	道浦久美子
事務局	西澤 泰彦	(三郷村教育委員会・教育次長)
	三澤 良彦	(安曇野市三郷総合支所 教育課長)
	那須野雅好	(〃 ・村誌編集係長)
	中田 育成	(〃 ・村誌編集係)

第3節 調査の経過

1. 事前協議

2005. 9. 13 (火)

三郷公民館において協議

出席者 豊科建設事務所

鶴見建設

三郷村教育委員会・那須野・今村

内容 ・発掘調査開始日
・調査範囲の確認
・交通規制・安全管理
・重機・トラック・プレハブ・トイレの手配
・駐車場・排土置き場の確保

等の確認

2. 発掘調査

9月27日(火) 調査開始・A区掘削
28日(水) A区検出作業
29日(木) A区調査
30日(金) A区調査
10月1日(土) A区調査
2日(日) A区調査
3日(月) A区調査
4日(火) A区調査
5日(水) A区調査
6日(木) A区調査
11日(火) A区調査
13日(木) A区調査・図面作成
15日(土) A区終了。埋め戻し・B区掘削
17日(月) B区検出作業
18日(火) B区調査・図面作成
22日(土) B区終了。埋め戻し
28日(金) C区掘削
31日(月) C区調査
11月1日(火) C区調査終了。埋め戻し

*りんご収穫の為D区開始まで、室内で整理作業

12月6日(火) D区掘削
7日(水) D区調査
8日(木) D区調査
9日(金) D区調査
12日(月) D区調査
13日(火) D区調査
14日(水) D区調査・図面作成・調査終了
15日(木) 撤収
以後、整理作業に入る

第4節 調査の方法

県道小倉・梓橋停車場線の一部拡張工事が計画実施されるに当たり、平成17年9月13日(火)に旧三郷村公民館で、関係者間において発掘調査に関する協議が行われた。

まず、工事範囲の確認によって、巾2m×長さ約100mが調査対象となった。調査は交通規制や安全管理上から、長さ20～30mを1回の調査区として設定し、重機による表土掘削、手作業での検出作業、遺構の掘り下げ、図面作成、写真撮影、埋め戻しという手順を繰り返して、進めていくことにした。

測量は、光波トランシットを用いて、基準点から原則的に3mのメッシュを組んで行った。遺物は、今回は小片が多かったため、出土地点を明記して分納した。現場の安全管理は、調査中も一般の通行があるためフェンス、信号機の設置等を行った。

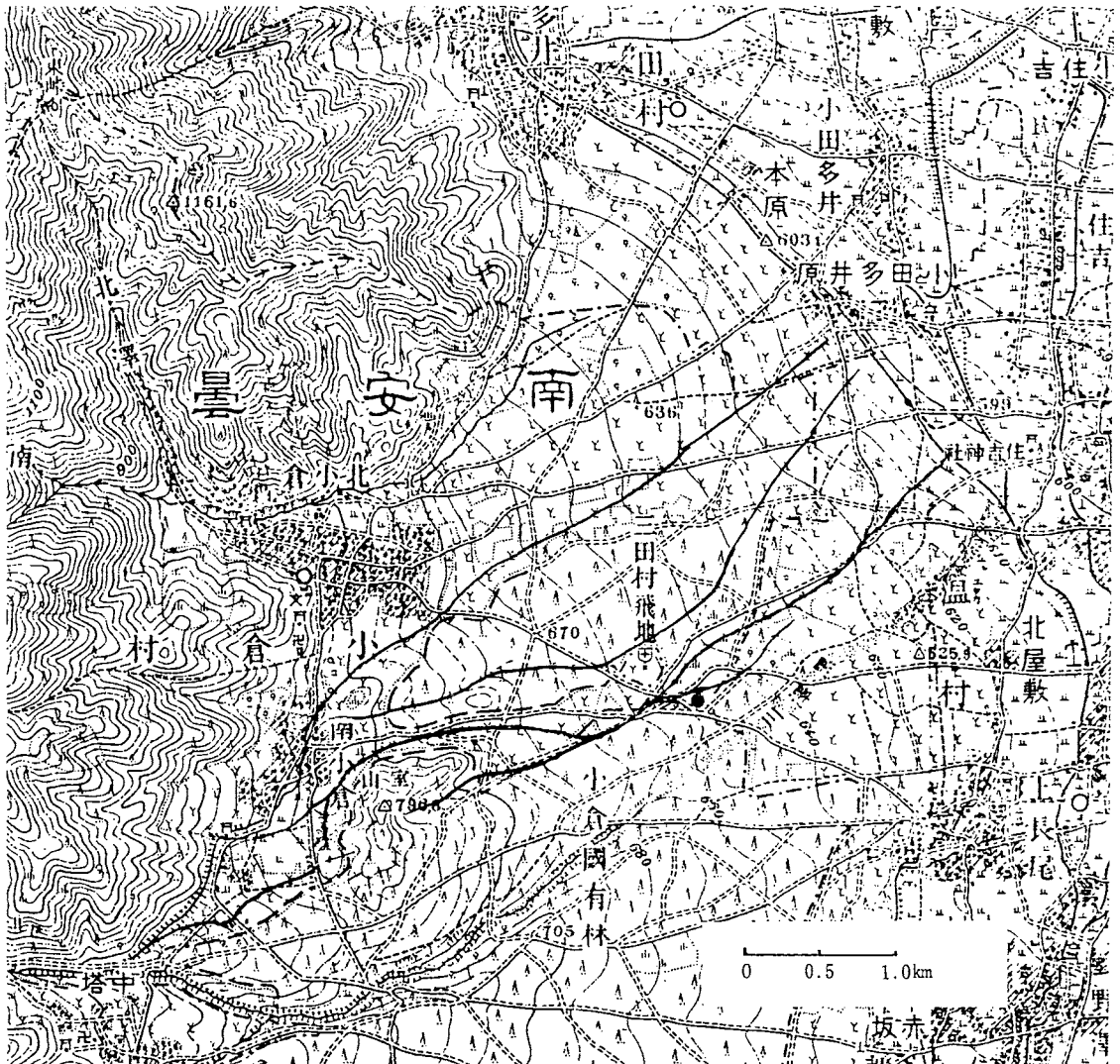
第2章 東小倉遺跡周辺の環境

第1節 地形と地質

この付近の地形・地質については「東小倉遺跡（1995）三郷村教育委員会」の中で森義直氏により詳記されているので、それを参考に報告する。

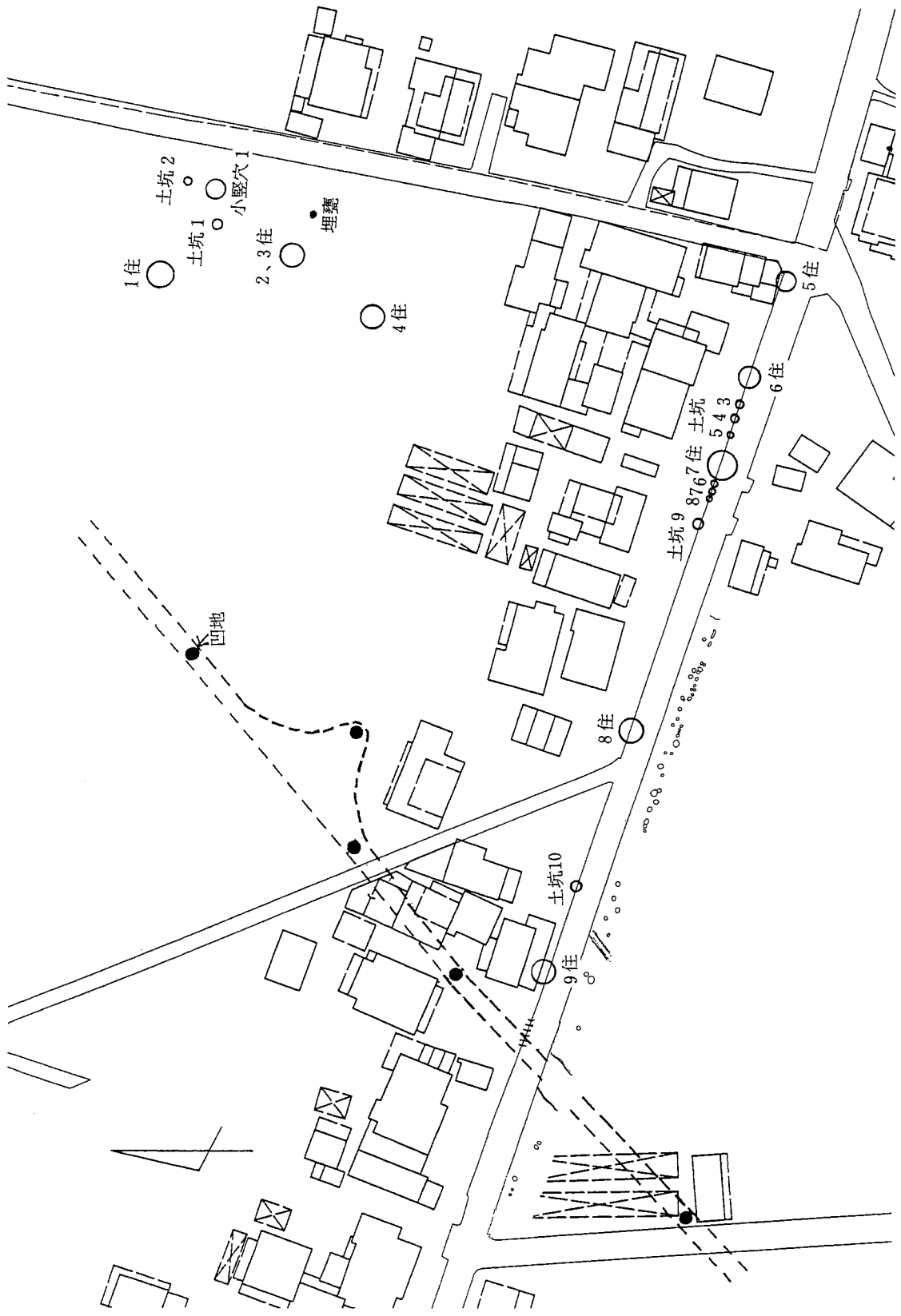
1. 地形

調査地域を含む信頼できる最古の地形図は、大日本帝國陸地測量部による明治43年（1910）に測図されたものである。この図は昭和2年（1927）に増補改訂されているが、調査地域は小倉國有林と記載されており、開発前の地形を知ることができるので、この図を参考にした。



第2図 黒沢川扇状地北部の地形

～凹地を示す
●調査地点



第3図 調査地点で見られる凹地と遺跡全体図 (1:1000)

(1) 梓川扇状地と黒沢川扇状地

調査地域は松本市の西方に位置する北アルプス山麓安曇野市三郷小倉、黒沢川扇状地の東部に当たり、県道小倉梓橋停車場線の海拔652m～655mの地点である。

北アルプス山麓は日本でも有数の扇状地が見られる所である。南より黒沢川扇状地、烏川扇状地、中房川扇状地、芦間川扇状地などが分布するが、これ等の扇状地は、松本盆地の形成と北アルプスの隆起に関係しているものと考えられている。

フォッサマグナの海が北方へ退後の更新世中期、地溝状に陥没した松本盆地に北方から高瀬川、南方からは梓川などの河川により砂礫が運搬され、埋積が行われ扇状地が形成された。更新世後期には御岳火山・乗鞍岳火山が活動し、火山灰などを広く降下させた。その火山灰はロームとして形成中の梓川扇状地砂礫層中に層状・レンズ状にとり込まれている。北アルプスの隆起が進むにつれ、鳴沢川や黒沢川、本神沢などの侵食力も高まり、梓川扇状地に指交関係を示しながら砂礫を運搬堆積し扇状地をつくりはじめると、それに押されて梓川は東へ移動したと思われる。黒沢川扇状地は、梓川扇状地を土台として形成された。

更新世後期末に乗鞍岳が火山灰を噴出した最終活動があり、その火山灰が梓川扇状地や黒沢川扇状地を厚く覆った。約一万年前の出来事で、このロームで覆われた面を上野面と呼ぶ。黒沢川扇状地は大部分が上野面にあたる。

上野面形成後土地の隆起があり、それに伴い梓川の下刻作用が進み、上野面の扇端が侵食されて巾と呼ばれる侵食崖がつくられた。このときつくられた段丘が、上野面より一段低い丸田面と呼ばれる段丘である。梓川村丸田、立田、三郷村の大部分がこの面上にある。

(2) 黒沢川扇状地北部

調査地は黒沢川左岸で黒沢橋の西北西約150m、比高約7mに位置する。この付近の凹地（少なくとも出水時には水が流れたと予想される）を地形図上で示したのが第2図である。

この図から鳴沢川と黒沢川とがつくる扇状地は指交関係にある



写真1

も、浄心寺から小田多井原にかけての凹地で複合しているのが見られる。

全体の凹地の示す方向は現黒沢川や鳴沢川とほぼ平行しており、北東の方向を示している。調査地は北東方向に緩く傾斜する扇面上に位置するが、この付近の凹地を上流へ辿ると室山の西側を経て北黒沢川へ続くと推定できる（写真1）。



写真2

また第9号住居址の西方に北東—南西方向に続く浅い凹地が見られ、この一部は今でも池として利用されている（写真2）。これは、上記推定される凹地の支流ではないかと思われる（第2図）。

2. 地 質

(1) 黒沢川扇状地

黒沢川扇状地の堆積物は、松本市梓川の上角から安曇野市三郷野沢にかけて発達する段丘崖で見ることができる。この崖では梓川の運搬した砂礫を主に、二次的に堆積したロームがレンズ状に挟まれる。この礫中には乗鞍安山岩や焼岳安山岩の円礫が上部に目立つ。黒沢川の運搬した角礫状の砂礫は硬砂岩や泥岩・チャートが主で、その上に2～3mの乗鞍ロームが重なる。ローム堆積後、黒沢橋付近を境として、それより上流は北アルプスの隆起などの影響で黒沢川による下刻作用が進み、黒沢扇状地を解析し黒沢川合流点では比高24mの段丘崖をつくっている。一方黒沢橋付近より下流では、解析され運ばれた土砂が二次堆積を行い、東は上長尾の南、北は安曇野市堀金付近にかけて氾濫した。近年黒沢川の流路は固定されたが、川床への砂礫の堆積ははげしく、下流は天井川となっている。

(2) 調査地点

この付近の黒沢川扇状地は主として黒沢川によって形成されたものである。上野面形成以後、その上面は黒沢川の氾濫堆積物及び北アルプスよりの押し出しによる堆積物によって覆われている。調査地は道路の側溝に当たり、一部遺構は道路の下に拡がっている。

るので、道路工事以前の状況を、6号住居址北にあたる堀内氏宅の庭で観察した（第3図）。それによるとローム層の上部に流理を示す河川堆積物があり、その上にローム混じりの2～5cm大の亜角礫をもつ砂礫層が重なる。この地層は森義直（1995）による洪水時に伴う堆積物である。

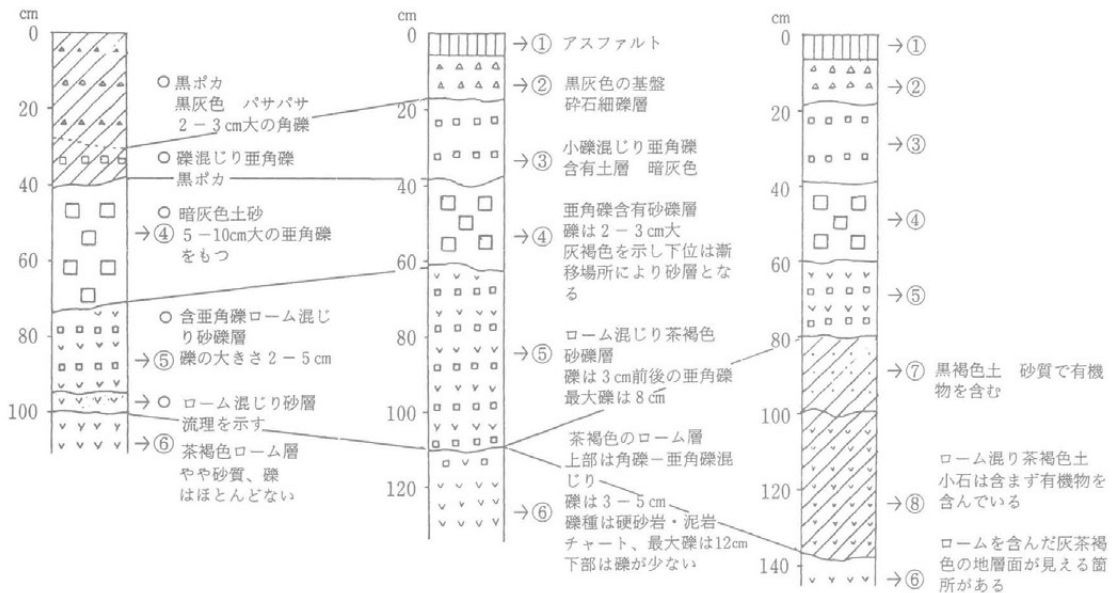


写真3

その上にはロームの混じらない洪水によると思われる堆積物が重なり、更にその上は角礫をもつ黒灰色の黒ボカ土となっている。

次に、道路側の地層の柱状図を第4図に示す。この図から道路側では上位にアスファルトとその下の路盤工事によって敷かれた碎石土層が、黒ボカを取り除いた上に重ねられたことがわかる。

この道路は西へ向かって緩く高度を上げており、ローム層もその傾向を示しており、現地形はローム堆積時の地形と調和的である。この図をこの地点の標準柱状図として表



第4図 6号住居址北部の柱状図

第5図 6号住居址付近の柱状図

第6図 9号住居址西部の柱状図

し、上位より①～⑥に分け、各地層の特徴を付記すると共に、前記柱状図との関係を破線で示した。遺構図の土層断面図に示した①～⑥はこの層序によるものである。

なお9号住居址より西へ6mの地点には原因不明の落ち込みが見られたので、その柱状図を第5図に示す。この地点は最下にロームを含んだ灰褐色の地層面が見られる箇所があり、その下には礫層が存在することやこの付近を第3図に示す凹地が認められることから、上野面形成後、この地点に小川があり、ロームが流されその下位の旧扇状地の礫層が一部露出したと思われる（写真3）この落ち込みはN50°Eの方向を示し、幅が5m位東の落ち込み角が50°NWの急角を示すが、西端は傾斜がゆるやかである。この凹地は⑧の茶褐色のローム混じりの有機物や⑦の黒褐色土で埋積された後、⑤の洪水時に伴う堆積物によって、覆われたのではないかと推測できる。（木船 清）

第2節 歴史的環境と三郷地域内の遺跡

第1図でみるように、三郷地域には現在までに、53箇所の遺跡が確認されている。そしてその分布は、山麓沿い、黒沢川沿い、鳴沢川沿い、段丘下の水田地帯の4地帯に濃厚にみられる。段丘下の水田地帯は、平安期の遺跡が多いが、他は縄文期の遺跡が圧倒的に多いという特徴を示している。

今回、調査の実施された東小倉遺跡は、黒沢川沿い（黒沢左岸）に所在し、広範囲にわたって縄文時代前期・中期・後期の遺物を出土することで知られている遺跡の一つであった。黒沢川沿いの遺跡は、上流から左岸では、黒沢浄水場東、南松原、本遺跡、三角原の各遺跡が、右岸では、押入（松本市梓川中塔）、長者屋敷（梓川村境界）、稻荷西、調整池北、黒沢川右岸、チンクラ屋敷、若宮、堂原等の各遺跡が続いている。黒沢川は現在は住吉神社西方で終わり、堰に接続するという珍しい川であるが、かつての氾濫原もしくは流路の延長である上長尾、楡、住吉の各地区に存在している各遺跡も黒沢川沿いの遺跡と呼んでもよいと思われる。昭和24年の楡道下遺跡（当時は及木遺跡と呼ぶ）の発掘調査では、黒沢川の小自然流を示すかのような堆積物が観察されている。

この黒沢川周辺に人々の往来があったのは、先記遺跡の内容から考えて縄文時代早期橋川押型文土器を持った人々の稻荷西遺跡への訪れにまでさかのぼると考えられていたが、第1次の東小倉遺跡の調査で草創期にまでさかのぼることが判明した。次いで縄文前期には、本遺跡をはじめ、調整池北、黒沢浄水場東、黒沢川右岸（特別養護老人ホーム）に生活の場を残している。特に、本遺跡の対岸に当たる黒沢川右岸遺跡は、昭和58年に発掘調査が実施され、住居址と小竪穴を検出している。出土土器は絡条体圧痕文土器や繊維を含む縄文土器、薄い器厚の条痕文土器等であることから、縄文早期末から前期初頭に比定される内容である。黒沢浄水場東遺跡は、縄文前期末の下鳥式土器を出土

する小範囲の遺跡であったが、圃場整備事業で消滅してしまった。黒沢川沿い以外では、鳴沢川右岸に位置する北小倉の才の神遺跡が注目される。有尾式、北白川下層式の前期土器を出土する他に、後期、晩期までの内容をもつ遺跡として、三郷地域はもとより旧南安曇郡下でも特筆される遺跡である。

縄文時代中期になると黒沢川沿いは最盛期を迎える。本格的な村づくりが始まって、その集落が、長者屋敷、南松原、そして本遺跡にみられる。南松原遺跡は、昭和45年に発掘調査され、遺跡範囲の一部分の調査であったが、14軒の竪穴住居址の確認があった。広範囲からの遺物出土があるので規模の大きい集落が考えられる。勝坂式土器が中心を占めることから、本遺跡で今回調査されたものより先行する内容をもった遺跡といえる。黒沢川右岸遺跡からは本遺跡と同時期の竪穴住居址を検出している。鳴沢川沿いにも中期遺跡があり、三郷で12箇所が数えられ、一番遺跡の多かった時代である。

縄文後期になると本遺跡の他に、才の神、鳴沢、地藏沖、楡小路の各遺跡が、そして晩期になるとさらに数が減って本遺跡と才の神遺跡が知られるだけである。全盛を極めた中期文化も次第に衰退の様相を示していることが遺跡数の上からも示されたといえよう。この現象は全局的な傾向であり、冷涼化する気候が大きく影響しているものと考えられる。三郷地域の後・晩期は、上記遺跡からの散発的な土器片の出土があるだけで、その生活内容等を知る資料は今のところ得られていない。

次いで弥生時代を迎えると旧南安曇郡下では他地域に先がけて黒沢川右岸、堂原の両遺跡にその文化の伝来をみている。黒沢川右岸遺跡の昭和58年の発掘調査では、弥生中期の竪穴住居址を2軒検出しており、弥生文化の波及を考える上で貴重な遺跡となっている。しかし後続せず、短期間の住居で終わってしまっている。そしてこの黒沢川右岸遺跡を最後にして上流域では遺跡がみられなくなるが、古代に至って下流域の三角原、楡小路、楡中村、楡上手、楡道下、住吉丁田等に人々の住居がみられるようになる。水田地帯となっている沖積地であるが、黒沢川の川尻に当たり、黒沢川の小支流を利用した生活であったものと考えられる。これらの遺跡は平安期の遺物を出す遺跡が多く、長尾栗の木下遺跡や坂がいと遺跡等を含めて、住吉庄開発の歴史を考える上で大切な遺跡群となろう。

また本遺跡の範囲内であるアルプス学園前に古墳と呼んでもよいのか躊躇よするような小古墳があり、昭和25年に調査されている。石室は1m程度のもので2個の石が残っていたのみで、出土遺物等は不明である。

以上、東小倉遺跡の所在する黒沢川沿いの遺跡を中心に列記したが、先記のように三郷では遺跡の密集する地域である。これは黒沢川の水が人々の生活にとって必要なものであったり、両側に展開する広大な扇状地は食糧獲得の地としてきわめて重要であったりしたからであろう。特に採集生活を中心とする縄文時代にあっては、そのことが強く

うかがわれる。しかし稲作りを中心とする弥生時代以降にあっては、多孔質の扇状地は水持ちが悪くて水田耕作には適さないため、順次沖積地への進出となったのである。

(山田瑞穂)

第3章 VI次調査の遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代中期後半の堅穴状遺構1、溝2条、土壙52基を調査した。まとめの項でも触れたが、大正後期の小倉簡易水道埋設工事の影響と考えられるカクランや、包含層の削平がほぼ全調査区に及んでいたため、地山となる黄色土ロームを掘りこんだ遺構と、その覆土中に含まれた遺物がわずかに、得られたにとどまる。

1. 遺 構

①堅穴状遺構 1

A区東端に位置する。規模・形状は不明である。深さは約43cmと深い。住居址の可能性もあるが、炉址等の確認が出来ていないので、堅穴状遺構とした。

(遺物) 第15図 1～8

1は、横位隆帯文の一部と思われる。2は、隆線による褶曲文であろうか。3・4は、綾形状沈線文を地文とし、4は、左右に枝分かれた渦巻き文の一部であろうか。1～4は、縄文時代中期後半に属すと思われる。5は、半載竹管による平行沈線とみられ、中期中葉に位置付けられる。混入と思われる。6～8は、縄文が施文された一群である。遺物から本址は、縄文時代中期後半に帰属すると思われる。

②溝 1

C区中間地点に位置する。巾は、60cm弱。深さは、平均13cm。断面はなだらかな船底形を呈する。遺物はほとんど無く時期は不明である。

③溝 2

D区東寄りに位置する。本址は、平成14年の3次調査でも確認されているが、東小倉遺跡の縄文時代集落の西端を画する遺構として、重要視しているものである。第 図に平面図と断面図を図示したが、溝東壁は急角度に立ち上がり、西壁はそれに比較して、ややゆるやかに立ち上がる。覆土の堆積は、断面観察から水量があまり無い凹地状地形が、徐々に堆積していったことがうかがわれる。

(遺物) 第15図 1

前回調査時は、覆土中から土器の出土が無く、今回期待を持って調査したがわずか1点小片が、得られたのみである。小片のため不明な点が多いが、褶曲文の一部であろうか。本址の時期を決定づける資料が乏しいが、縄文時代に帰属する可能性はあるだろう。

2. A・B・C・D区検出面出土土器

①A 区 (第14図 1～13)

1は、口縁部の破片である。雑な感じに粘土紐を口縁端部に貼りつけている。2～4・7は大柄渦巻き文の一群で、ここまでは中期後半に帰属しよう。5は、縦位沈線。

6は、細い平行沈線で、中期中葉に属するものだろうか。8～13は、縄文地文の一群を集めた。

②B 区（第15図 1・2）

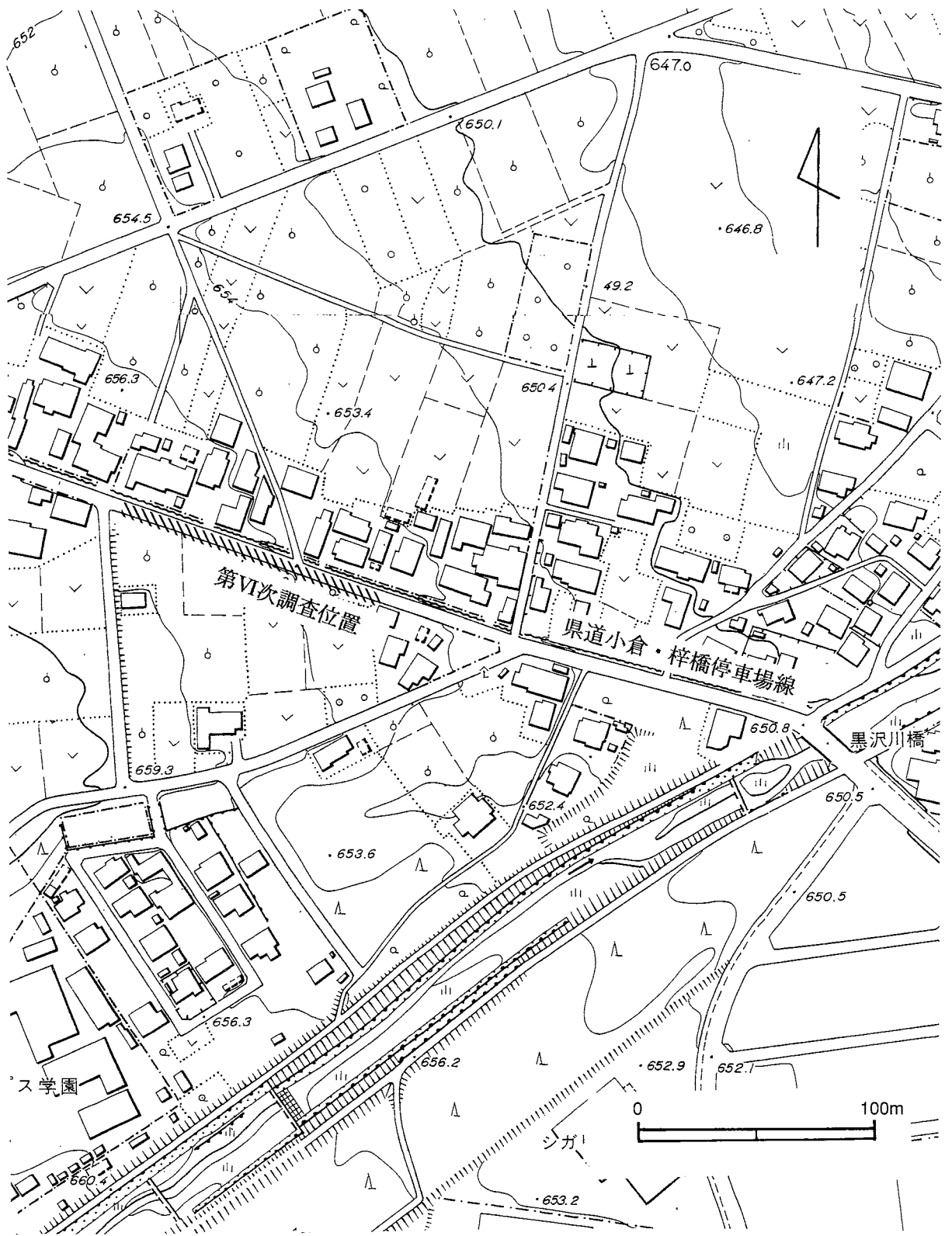
1は、櫛形文の一部か。2は、連続押し引きが観察される。

③C 区（第15図 1～4）

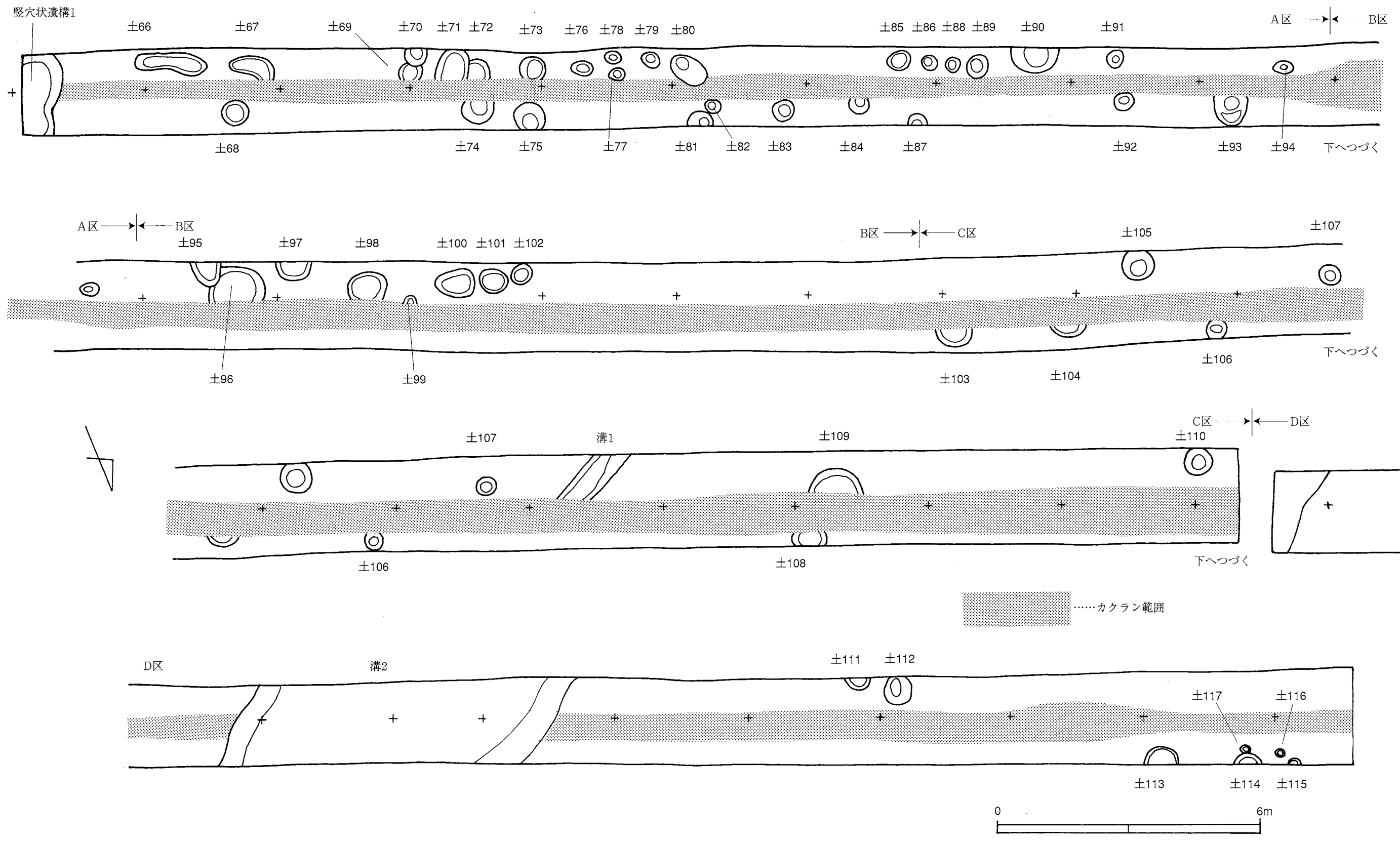
1は、縦位沈線。2は、縦方向の隆帯の一部か。3は、半載竹管による浅い沈線。

④D 区（第15図1～3）

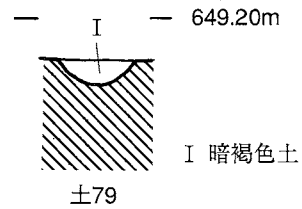
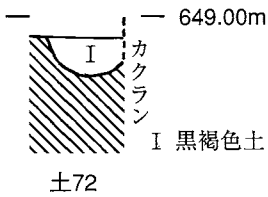
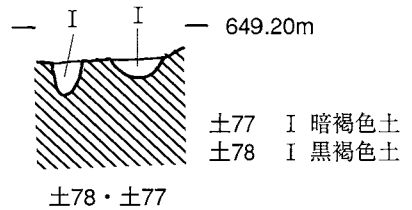
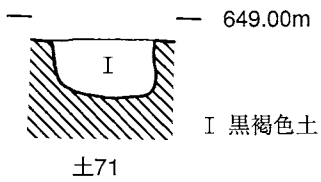
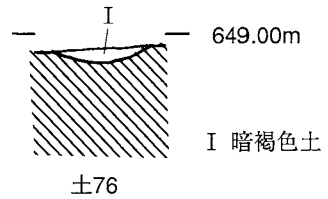
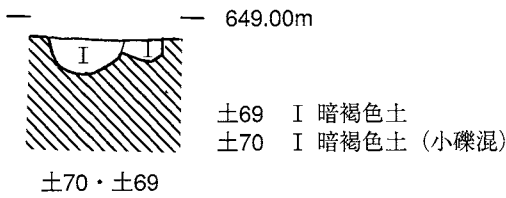
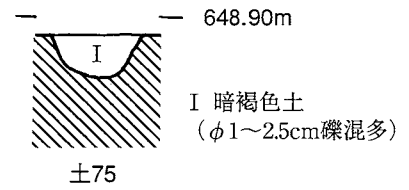
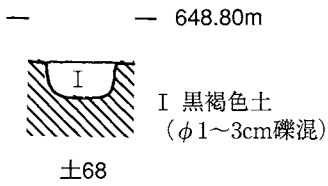
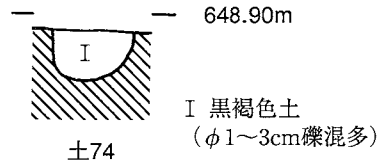
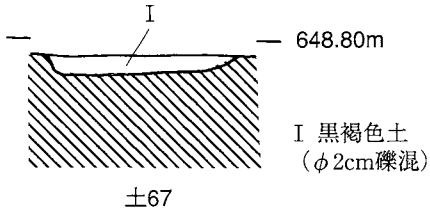
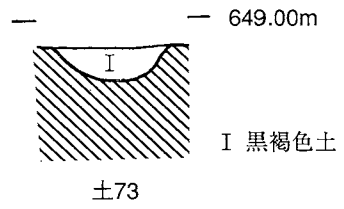
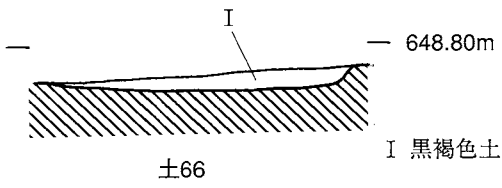
1は、櫛形文。2は、平行沈線。3は、角押文でいずれも、縄文時代中期中葉に属すだろう。



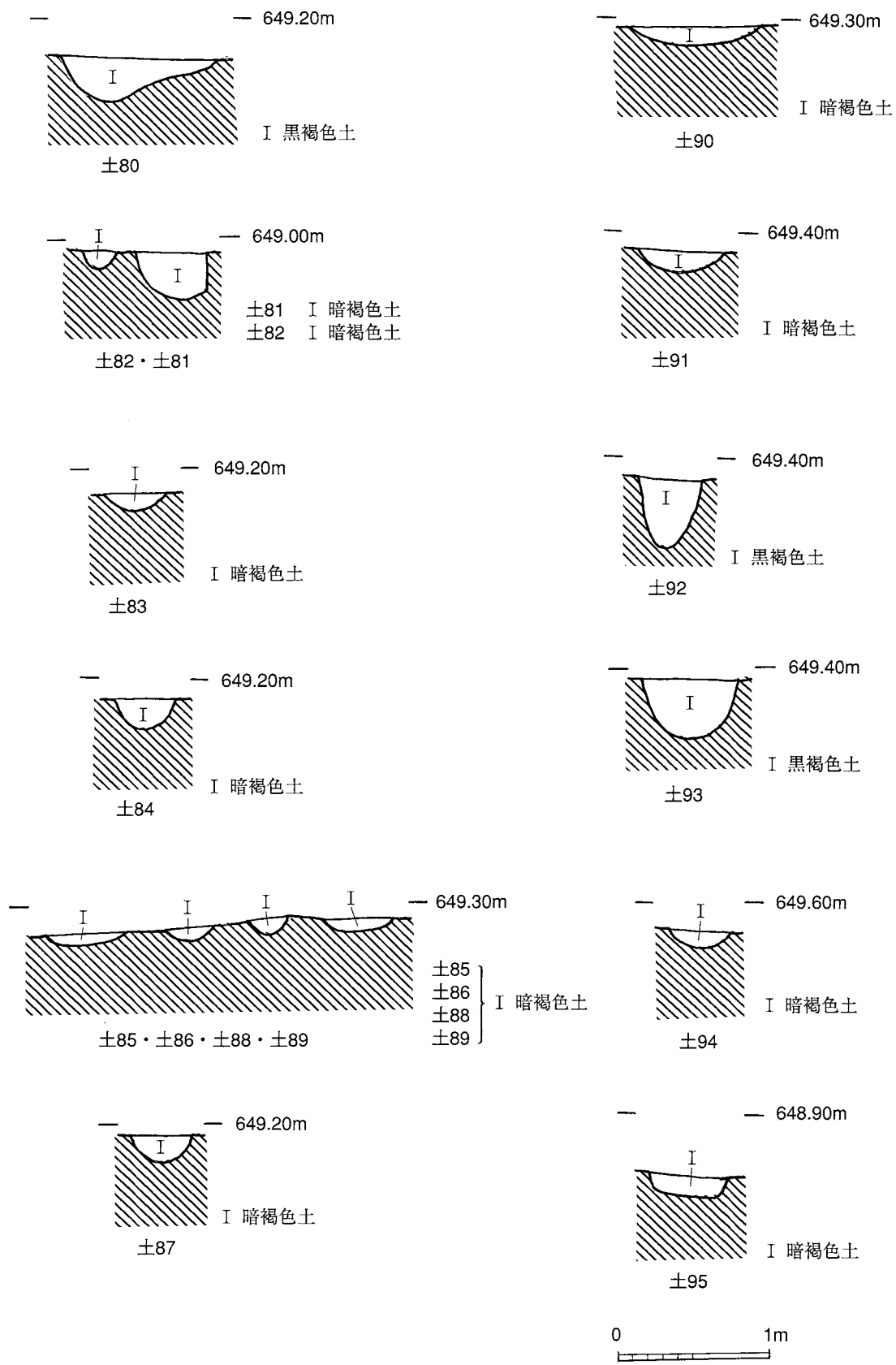
第7図 調査位置図



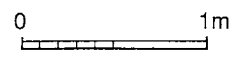
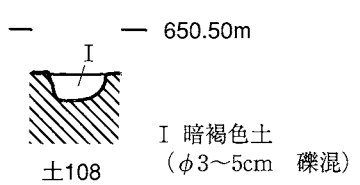
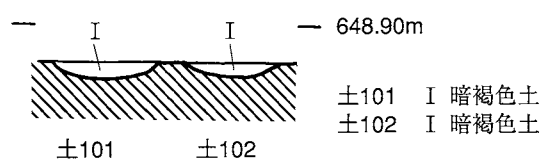
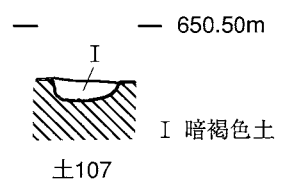
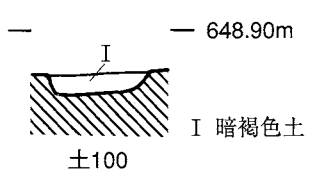
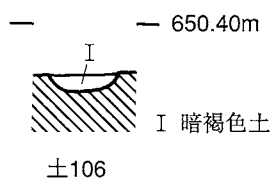
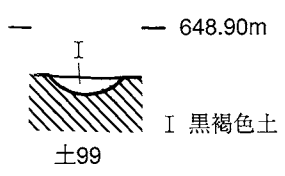
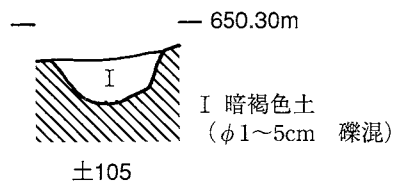
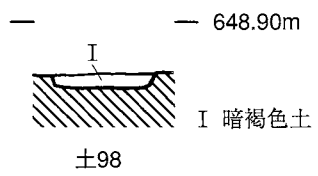
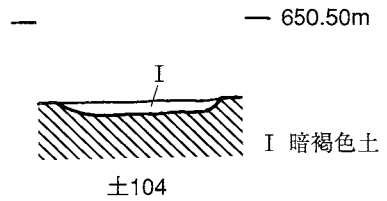
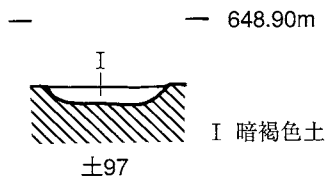
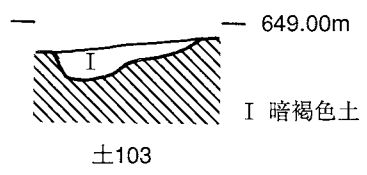
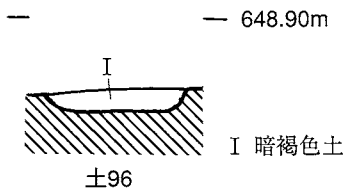
第8図 遺構配置図



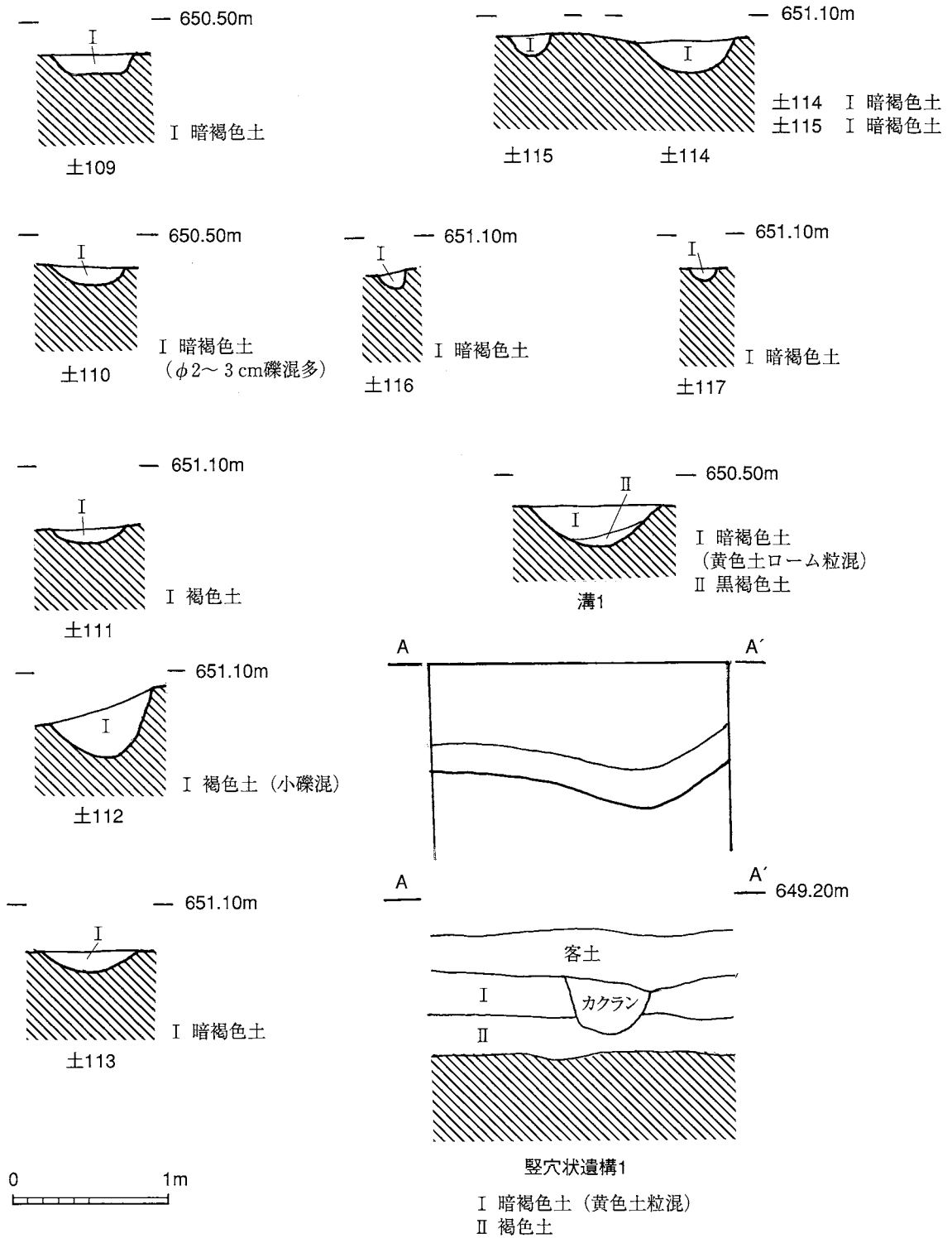
第9図 土坑66~79



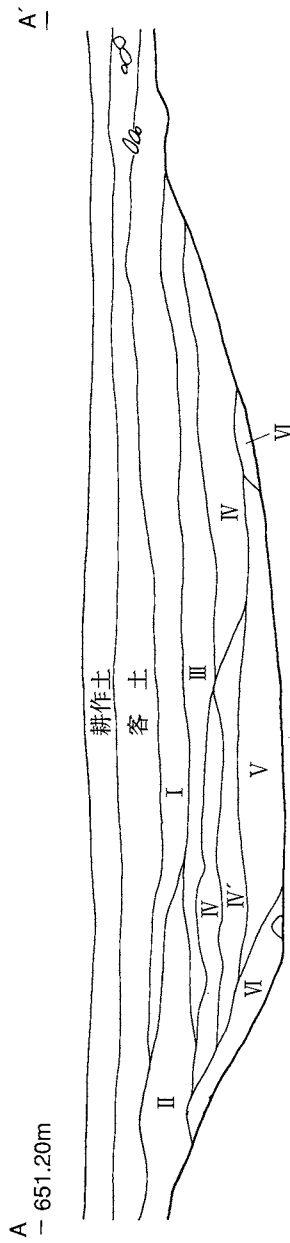
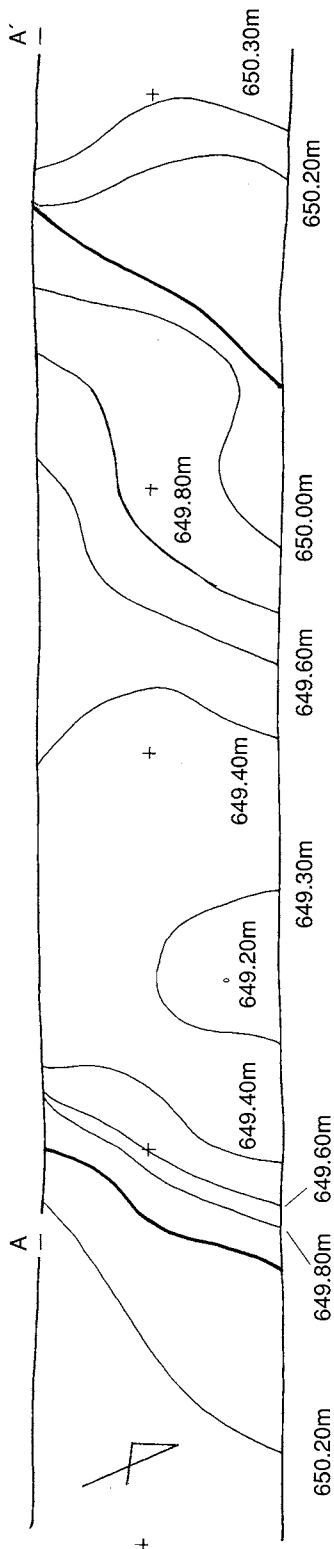
第10圖 土坑80~95



第11図 土坑96~108



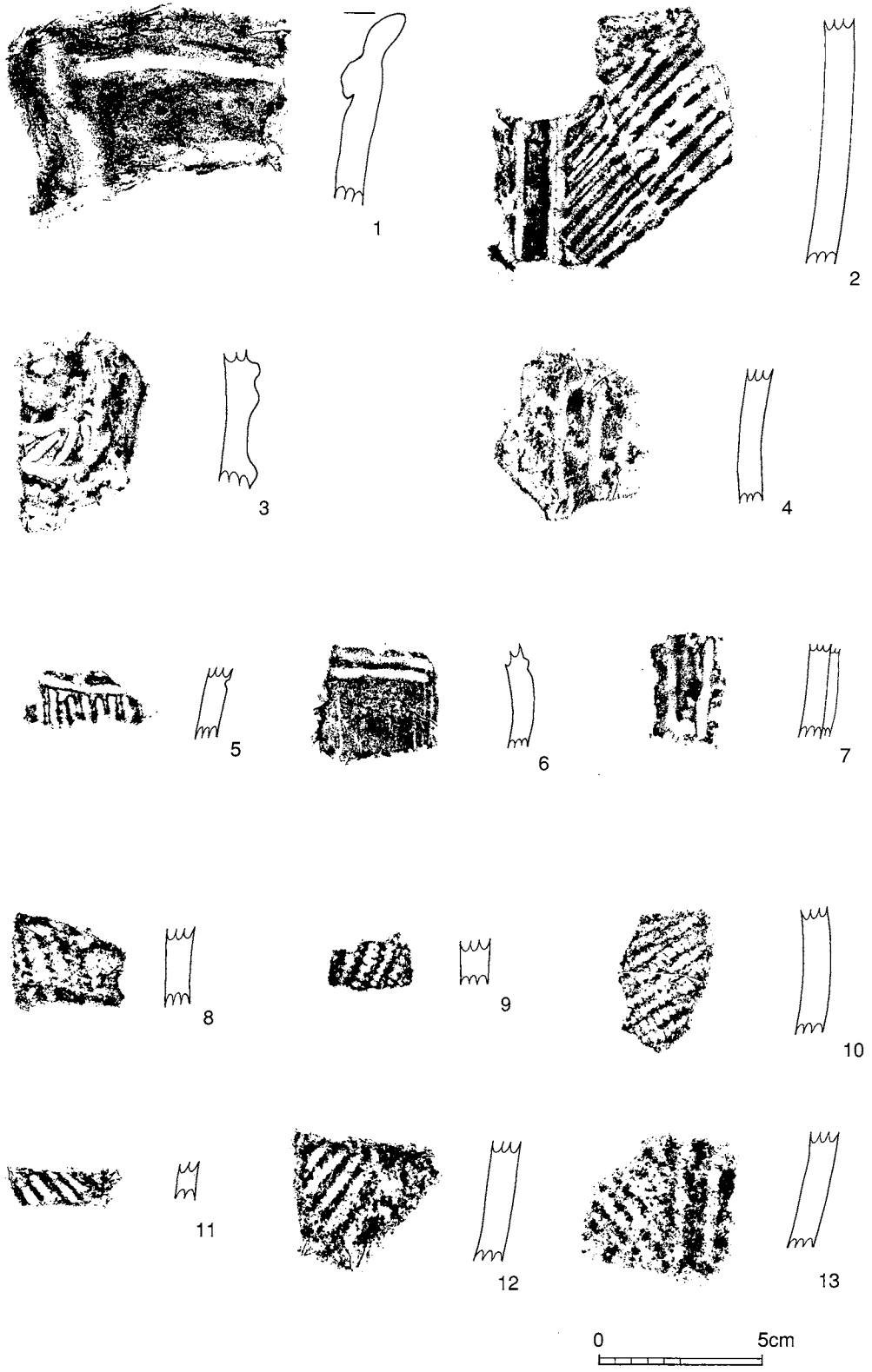
第12図 土坑109~117溝1・豎1



- I 暗灰褐色土
- II 小礫層
- III 灰黄褐色土 (φ1~2cm礫混)
- IV 暗褐色土 (φ1~2cm礫混多)
- IV' (黄色土粒多く含む)
- V 黒褐色土 (粒子細かく、礫をほとんど含まない)
- VI 黒褐色土 (小~中礫多く含む)

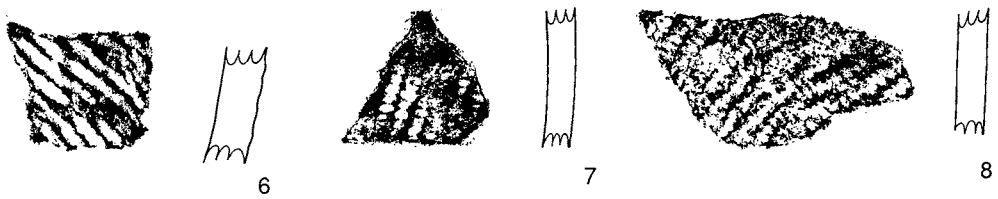
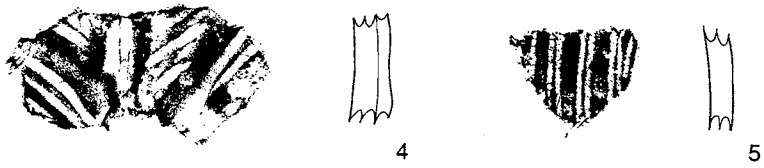


第13図 溝2

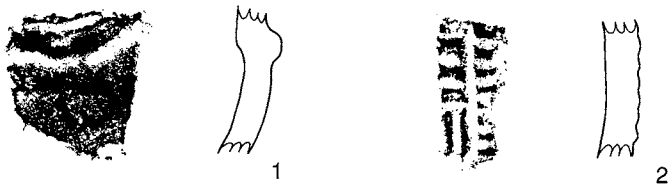


第14图 A区検出面出土土器拓影

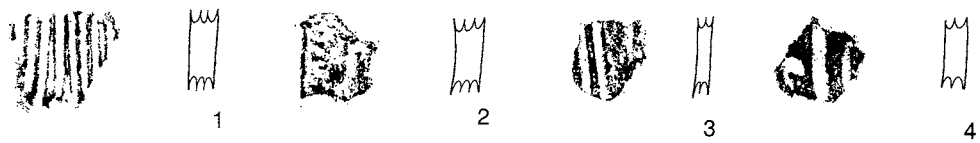
豎 1



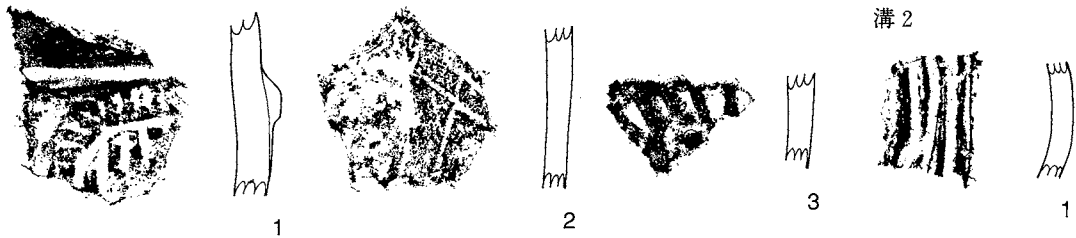
B区検出面



C区検出面



D区検出面



0 5cm

第15図 豎 1・B・C・D区検出面・溝 2 出土土器拓影

第4章 まとめ

今回の東小倉遺跡第Ⅵ次調査は、平成14年に同所で行った第Ⅲ次調査のすぐ南側を発掘することになった為、前回と同様縄文時代の住居址や遺物の発見が期待された。

調査範囲は、巾2m長さ約100mと面的調査というより、線的調査にとどまる点は工事範囲の関係からやむを得ないが、他所ではこの程度の工事では立会い調査すら行わない等の話も伝わる中で、関係者の努力によって発掘調査が実施されることは重要だと言える。

調査区は大正後期の小倉簡易水道の埋設が行われた地点と重なっていて、当時の工事による影響が懸念された。発掘調査を実施するため、重機で表土をはいだ所、やはり工事による攪乱が見られ、なおかつ遺物包含層も削平されていることが判明した。かろうじて黄色土ロームの地山を掘り込んだ遺構は残っていたが、調査前に期待された住居址等の痕跡は、確認出来なかった。

過去5回にわたる発掘調査によって東小倉遺跡の範囲については、かなり把握できつつある。その中で西側に南北に走る大きな溝の存在が、遺跡の西端を画す重要なポイントになるという事を、以前の報告書の中でも述べてきた（東小倉遺跡第Ⅳ次参照。三郷村教育委員会2005）。今回の調査でもこの溝が、確認できた点は大きな成果と言える。ただ残念なのは、前述したように過去の工事の影響で、この溝からさらに西側に集落が展開するのかもしれないのか、つまり住居址の有無をはっきりと確認出来なかった点が悔やまれる。調査地点の周辺は宅地化されていない部分もまだ多少残っていることから、遺跡はまだ地下に保存されていることが期待される。

東小倉遺跡の内容を解明するには、発掘調査を行わなければならないが、反面記録保存と言っても、遺跡を破壊してしまうことになるため、むやみに発掘すべきではないと考える。遺跡をどのように保護していくのか、重要な課題と言えるし、そのための努力はしていきたいものである。

(今村 克)

引用・参考文献

- 百瀬忠幸（1987）「殿村遺跡」東筑摩郡山形村教育委員会
- 山下泰永（2001）「他谷遺跡」南安曇郡穂高町教育委員会
- 小口栄一郎他（2003）「熊久保遺跡」東筑摩郡朝日村教育委員会
- 長野県（1985）「長野県史」考古資料編

写 真



B区全景



C区全景



D区全景



A区作業風景



A区作業風景



測量・掘り下げ作業



D区作業風景

図版4 A区遺構



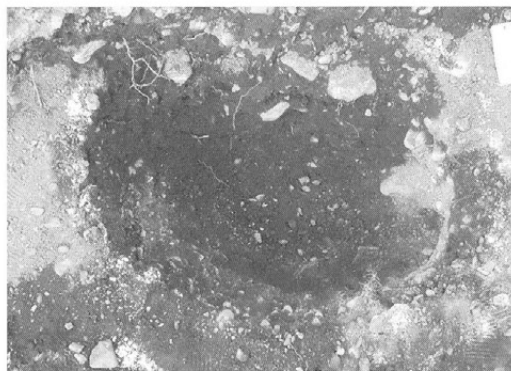
土67



土68



土74



土75



左から土76・土77・土78



竪穴状遺構1



B区 重機による掘削



B区全景（西より）



土95・土96（手前）



土97



土98（左）・土99（右）



土103

图版 6 C区遺構



土105



土106



土107



溝 1



土109



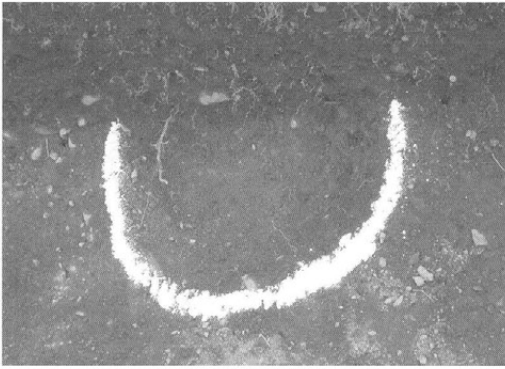
土110



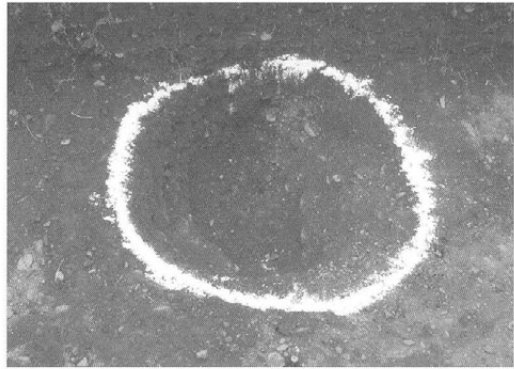
D区 重機による掘削



D区 発掘作業風景



土111



土112



土114・土117 (手前)



溝2

東小倉遺跡Ⅳ発掘調査報告書抄録

ふりがな	ひがしおぐらいせき							
書名	東小倉遺跡Ⅴ							
副書名	県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第1集							
編集者名	今村克 山田瑞穂 木船清 那須野雅好							
編集機関	安曇野市教育委員会							
所在地	〒399-7102 長野県安曇野市明科中川手6824-1							
発行年月日	(2006) 平成18年3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしおぐら 東小倉	ながのけんあづみのし 長野県安曇野市 みさとおぐら 三郷小倉	204668	6	36度 15分 14秒	137度 52分 01秒	平成17年 9月27日 } 平成18年 3月10日	220m ²	県道改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項			
東小倉	集落跡	縄文時代	縄文時代中期後半の 竪穴状遺構1、 溝2条、土坑52個	縄文時代中期後半の 土器	平成14年に、今回の調査箇所北側隣接地を調査しているが、その際、縄文時代中期後半の住居址10軒が発見され、今回も慎重な対応が求められた。結果として昭和初期の簡易水道施設が調査地点の中央を横断しており、遺物包蔵含層及び遺構に多大な影響を与えていたことが判明した。今回は上記事業の削平を免れた土坑や溝が中心の調査となったが、遺跡の西側境の確認や、遺跡に影響を与えていたと思われる自然水路などが確認され、一定の成果を得たものである。			

安曇野市の埋蔵文化財第1集

東小倉遺跡 V

平成18年3月3日 印刷

平成18年3月9日 発行

編集発行 〒399-7102

長野県安曇野市明科中川手6824番地1

安曇野市教育委員会

印刷 電算印刷株式会社

